大岡昇平の世界

収容所としての戦中・戦後 磯田光一
戦友への約束 小田実
「野火」と「武蔵野夫人」 埴谷雄高
〈政治〉と〈情事〉 清水徹
「花影」論 加賀乙彦
「事件」と「サッコとヴァンゼッティ」 奥平康弘
「天誅組」について 安岡章太郎
歴史への視点 亀井秀雄
「レイテ戦記」解説 大江健三郎
罪なくして十字架にかけられた者によって 中川久定
批評的劇 粟津則雄
詩人と散文家 吉田凞生
歴史の中の人間探究 高橋英夫
批評と小説の間 秋山駿
人間の今の生のために 中野孝次
小説の魅力を解く 菅野昭正
ある自己回帰者(エゴチスト)の旅 辻邦生
作者の言葉 大岡昇平

岩波書店

大岡昇平の世界

岩波書店

大岡昇平の世界

一九八九年九月二八日　第一刷発行©
一九八九年一一月一四日　第二刷発行

定価二三〇〇円
（本体二二三三円）

著　者　大江健三郎（おおえけんざぶろう）他
発行者　緑川亨
〒101-02　東京都千代田区一ツ橋二-五-五
発行所　株式会社　岩波書店
電話　〇三-二六五-四一一一
振替　東京六-二六二四〇
印刷・精興社　製本・松岳社

Printed in Japan
ISBN 4-00-000243-0

落丁本・乱丁本はお取替いたします

本書は、「大岡昇平集」(全一八巻、一九八三―八四年)に収められた「解説」を、第一巻から第一八巻まで順に配列し、併せて各巻所収の作品について著者が新たに記した「作者の言葉」を各「解説」の後に付し一冊としたものです。文中に「本書は」、「本巻は」とあるのは、いずれも「大岡昇平集」の各巻を指しています。

なお、「大岡昇平集」の編成は、左記のとおりです。

1 俘虜記
2 出征
3 武蔵野夫人・野火
4 ハムレット日記・酸素
5 花影
6 事件
7 天誅組
8 将門記
9 レイテ戦記(上)
10 レイテ戦記(下)
11 幼年・少年
12 富永太郎・小林秀雄
13 中原中也
14 文学論集
15 同時代Ⅰ 1937―1964
16 同時代Ⅱ 1965―1982
17 わがスタンダール
18 ザルツブルクの小枝

岩波書店

目　次

収容所としての戦中・戦後……磯田光一……一
戦友への約束……小田　実……一九
『野火』と『武蔵野夫人』……埴谷雄高……三九
《政治》と《情事》……清水　徹……五一
『花影』論……加賀乙彦……七九
『事件』と『サッコとヴァンゼッティ』……奥平康弘……九三
『天誅組』について……安岡章太郎……一一
歴史への視点……亀井秀雄……一三五
『レイテ戦記』解説……大江健三郎……一四三
罪なくして十字架にかけられた者によって……中川久定……一七三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

批評的劇……粟津則雄……一九九
詩人と散文家……吉田凞生……二一七
歴史の中の人間探究……高橋英夫……二三七
批評と小説の間……秋山駿……二五三
人間の今の生のために……中野孝次……二六七
小説の魅力を解く……菅野昭正……二八一
ある自己回帰者（エゴチスト）の旅……辻邦生……二九九

収容所としての戦中・戦後

磯田光一

大岡昇平氏が『俘虜記』について語る口調には、なにか独特な自嘲にちかいひびきがある。そのひびきは括弧つきの「文学」とは明らかに異なる領域から発しているように思われる。

私はたまたま自分の経験を書いた小説が売りものになり、成り上がり者のような生活を送っているが、捕虜の仲間、いや、われわれのように捕虜になる幸運に恵まれず、フィリピンの山野で、死んだ僚友を忘れたことはない。

（『この八月十五日』）

あるいはまた『わが文学に於ける意識と無意識』のなかで、「米軍に捕えられるまでの経験」や「俘虜収容所の生活」を「小説風に書い」て「作家」になったと大岡氏が書くとき、この「作家」という語には括弧がついているのである。多くの文学論を書いている大岡昇平氏が、『俘虜記』の成功に関

してだけは、いわゆる「文学」、いわゆる「作家」という含みで自身を語らざるを得ないのは、『俘虜記』の根底にあるものが通常の文学概念とは異質のものであることを暗示していると思われる。それにしても、自己確認の正確な記録として書きはじめられた『俘虜記』は、その鋭利な自己分析と即物的な表現方法を通じて、おそらく作者の意図をはるかに超えたものを実現しているのである。

『俘虜記』の「私」は出征の日まで「『祖国と運命を共にするまで』という観念に安住し」ていたが、輸送船に乗ったとき「単なる『死』がどっかりと私の前に腰を下して動かな」くなったという。この記述は『俘虜記』の「私」の外部社会にたいする位置を的確に示していると思われる。明治の末年に生れた大岡昇平氏の世代は、日露戦争後のナショナリズムの高揚期に義務教育を受け、その後、中等・高等教育を受ける過程で大正リベラリズムの一端に触れ、西欧近代思想の洗礼を受けているのである。『俘虜記』の作者のこのような世代的な特性は、戦前天皇制下の国家観念が大衆意識をすっぽりと包んでいる時代のなかで、国家の強制力を疑う目を所有していたことを意味している。この過程で、もし大岡昇平氏が戦前のマルクス主義の正義に自己を賭ける体験を通っていたら、『俘虜記』はおそらく別様の作品になっていたであろう。いざとなったら「祖国と運命を共にするまで」という断念は、国家の正義を少しも正当化することなく、さりとて反国家の行動に賭けるのでもないという、いわば純粋な「個人」の領域に〝生〟の根拠をみいだしていたことにほかなるまい。そして、こういう場所に据えられた〝眼〟は、苛酷な自己解析と事実の把握を通じて、戦中から戦後に通じる昭和史

の二つの空間を、他に類例をみないかたちでえがきつくしているのである。この二つの空間とは、二つの占領の空間ということである。

藤村道生『二つの占領と昭和史』(『世界』一九八一年八月号)によれば、明治時代にできた「戦時大本営条例」は宣戦布告のないかぎり大本営は設置できないものと解されていたという。ところが昭和十二年の日中戦争においては、陸軍は閣議の了承を得ないで新しい「大本営令」をつくって大本営を置いたのであり、この時点において文民統制を無視した〝軍による日本占領〟が成立した、と藤村氏は解している。この観点に立つかぎり、一九四〇年代とは〝軍国政権による日本占領〟と〝アメリカ軍による占領〟とが入れ替って連続した時代と規定できる。このとき『俘虜記』は、二つの占領空間のなかで人間が何を強制されたかをえがきつくした戦後で随一の作品としての風貌を示すのである。「捉まるまで」の章に出てくる中隊長のつぎのような態度は、何を意味しているであろうか。

彼は幹部候補生上りの若い中尉で、二十七歳であったが、無口で陰気で、三十歳より下には見えなかった。彼がノモンハンで何をし何を見たか、彼は一度も語らなかったが、その眼その顔には現れていた。私は彼の体にその僚友の死臭を嗅ぐ様にさえ思った。

「警備隊は警備地区をもってその墓場と心得ねばならぬ」と彼はいつもいっていたが、私は彼が通り一遍の訓示を行っていたとは思わない。

彼は我々の現在地を特に米軍から秘匿しようとはしなかった。サンホセから道案内した土民には、慣習に反して食糧を与え放ち帰らしめた。

若い読者には通じにくいであろうが、この部分にはつぎのような意味が含まれている。ノモンハンの戦闘を体験した中隊長は、すでに戦争の惨禍の極限のすがたを見てしまっている。しかも同じ悲惨が自分の中隊にも迫っている。このとき最後になし得ることは何か。この中隊長が米軍から日本軍の所在を隠そうとしなかったのは、全滅による死よりも俘虜になる機会を部下にあたえようとしたためである。「警備隊は警備地区をもってその墓場と心得ねばならぬ」とは、ここで死ねという意味ではない。むしろ逆に、ここで静かに待つがいい、米軍が来たらあらゆる屈辱をしのんで俘虜になれ、そしていつか生きて故郷に帰れる日を待つがいい、その機会を諸君にあたえるのが、中隊長としての自分の最後の責任のとり方である、という意味が少なくともその一部に含まれている。生きて俘虜になることを禁じた「戦陣訓」の思想を、この中隊長は裏切っていると言えるかもしれない。しかし「戦争の要請を至上命令として」自らに課していたこの中隊長は、「自己の死によってしか、その部下に対する要求を正当化」できなかったという。

この中隊長が現実にはどういう性格の人物であったかは別としても、少なくともここには、軍隊の指揮者としての責任のとり方の一端が語られている。そしてここには、軍国政権による日本占領の空

間の先端部が、俘虜収容所という戦後の占領空間にむかって開かれている構図が、さりげない叙述によって暗示されているのである。こういう空間の構成を、軽くみないでいただきたい。昭和二十年の鈴木貫太郎内閣による日本国家の「和平」への選択も、じつは〝軍による占領体制〟を〝アメリカによる占領体制〟にゆだねたという点で、『俘虜記』と同一の空間の転位を意味しているのである。『俘虜記』の「私」は米兵を撃たないことを通じて俘虜になるが、「戦陣訓」の思想が支配していた空間から、もう一つの空間に入っていったとき、そこには何が起ったであろうか。

私は俘虜となることを、日本の軍人の教えるほど恥ずべきものとは思っていなかった。(中略)しかし、今現に自分が俘虜になって見ると、同胞がなお生命を賭して戦いつつある時、自分のみ安閑として敵中に生を貪るのは、いかにも奇怪な、あるまじきことと思われた。

自由主義の洗礼をうけている「私」にしてみれば、戦力が尽きたときに俘虜になるのは当然のことと考えられる。しかし客観的な認識のとおりに「私」の感性が動かないのは、なおも死を賭して戦っている僚友たちへの負いめの感情があるためである。こういう感情を古風なものと考える人もあろうが、しかし、どんな戦争であろうと、共通の危難のもとに戦う集団は、いやおうなしに運命共同体を形づくってしまうものである。これは革命戦争であろうと同じことで、生死をかけて戦っている者に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

たいして戦いを放棄した者が負いめの感情をいだくのは当然のことではないか。

しかし『俘虜記』にえがかれた現実は、こうした倫理的な問題さえ徐々に崩壊してゆく過程をも含んでいる。「生きている俘虜」と「戦友」の二つの章は、収容所での俘虜たちの生態をえがきながら、人間の裸形のすがたを開示する。収容所の内部での階層の成立、下士官のエゴイズムの実態もさることながら、俘虜たちが自身を「投降」したのではない者とみせるために、いかなる作為と虚構とを用いたかがここで露呈されるのである。『俘虜記』を書くときの最初の意図が「私自身の経験の確認」にあったのに、「生きている俘虜」の章のまんなかあたりから、「書いている現在の自分の表現」という性格を帯びてくるということを、大岡昇平氏は『私の戦後史』(『大岡昇平全集』十三巻所収)で述べているが、この点については大岡氏とはちがって、私はこれを『俘虜記』の主題の分裂による欠陥とは考えないのである。むしろ逆に、後半部に「戦後」の視点が入りこんでいることが、収容所の空間を複眼で見ながら「戦後」のアレゴリーと化するうえで、すこぶる効果に働いていると私はみたい。さきに引用した中隊長の行動の裏の意味は、「投降」をかくしていた俘虜たちがふと秘密をもらしてしまうときの、つぎのような部分によって鮮明に照らし出されてくるのである。

増田伍長における「川下」はこのレイテの俘虜における「国道」と同じく彼の嘘に交った危険な真実ではなかったか、と私は疑っている。老練なる軍人たる彼にとって川下即ち比島人或いは米

軍を意味したのは明瞭であり、事実彼より遥かに戦いに馴れない兵士さえ、川上を選んでいる。

「川下」や「国道」でやむなく捕えられたという陳述は、「川下」や「国道」が「投降」による「俘虜」への道であるかぎり、自己弁護のためのフィクションにすぎない。「戦陣訓」への忠実をつらぬくためには「川上」へ行かなければおかしいのである。しかしここで、さきに紹介した中隊長の態度を思いおこすとき、事態はいくぶん異なってみえるであろう。「川上」が〝玉砕〟または〝戦病死〟への道であるとすれば、「川下」で米軍に出あって「投降」することが「戦後」という占領空間にいたる道なのである。ここにおいて『俘虜記』の後半部は、戦後の占領空間のアレゴリーとしての意味を持ちはじめる。「或る監禁状態を別の監禁状態で表わしてもいいはずだ」というデフォーの言葉が、エピグラムとして生きてくるのはここからである。

しかしながら、一つの空間からもう一つの空間への移行のうちには、さまざまな精神的なドラマがある。俘虜たちがフィクションを用いてまでも、自分がやむなく捕われたのだととりつくろうのは、形式上の問題にせよ、日本国家への忠誠が自身の名誉の問題として生きていたからである。しかし収容所に入ったことで生存をともかくも保証され、そのうえ収容所の生活が日本で教えられたものよりもはるかにマシであることに気づいたとき、俘虜たちは新しい現実に直面せざるを得ない。米軍にたいする「迎合」の問題は、「生きている俘虜」の今本やその書記にあたる中川にも部分的にみられる

が、もっとも典型的とみられるのは「新しき俘虜と古き俘虜」に出てくる綾野という人物であろう。「米軍が上陸すると間もなく行方不明となった」彼はやがて俘虜となり、「手伝いと称して米軍の収容所事務所へ出張し」ていたが、「何か米軍に情報を提供している」と噂されている。彼の言動は「周囲から白眼視され」ていたが、「戦争終了と共に、一部有志をもって結成された民主グループのようなものの急先鋒」となるのである。この綾野は『俘虜記』に出てくる人物のうちで、「思想的投降」者と呼びうる唯一の人物といっていいが、彼が日本国家への忠誠を否認する思想によって「投降」したとすれば、この思想の軸は占領軍を「解放軍」と規定した人びとの思軸の軸と、ほぼ重なりあうことになるであろう。『俘虜記』はこういう人物をもくっきりとえがき出すことによって、文字どおり戦後占領期のアレゴリーたり得ているのである。

この綾野という人物の行動の変化をも含めて、『俘虜記』において最大のターニング・ポイントをなしているのは、日本の敗戦による俘虜の立場の変化である。作者が「生きている俘虜」の章で述べているように、ここでいう「俘虜」とは敗戦時に抑留された者のことではなく、「日本が戦っていた間に、降服、或いは戦闘力を失うことによって、敵に捕えられた者」をさしている。それが「俘虜」の本質であった以上、たとえ国家の強制にもせよ、兵士を含む日本国民は収容所の外では戦いをつづけていたのである。俘虜はその戦列からの離脱者であるという点で、彼らは潜在的に国民を意識している。ところが敗戦は俘虜を支えていたこの大前提をくつがえしてしまう。しかし「私」の心のうえ

には、国家の敗戦が現実となったとき、あらためて国家が意識されてくるのである。

私は人生の道の半ばで祖国の滅亡に遇わなければならない身の不幸をしみじみと感じた。国を出る時私は死を覚悟し、敗けた日本はどうせ生き永らえるに値しないと思っていた。しかし私は今虜囚として生を得、どうしてもその日本に生きねばならぬ。

「私」がこう感じていたのに、現実はやがて異なる方向に動いてゆく。俘虜の心をともかくも支えていた倫理的心情が、裏切りの意識と同胞への負いめの気持であったのに、敗戦がこのけじめを突きくずしてしまうのである。しかし問題はさらに複雑な側面を持っていて、敗戦を契機にはじめて武装解除を受けた者たち——前述のように彼らは厳密な意味では俘虜ではない——が新たに収容所に入ってきたとき、ここに両者の対立が起ってくるのである。敗戦を知るまで苛酷な運命に耐えた人びとは、「生きて虜囚の辱を受けず」という「戦陣訓」の思想をつらぬいたのであり、彼らが俘虜としてとらわれていた者を憎悪したのはなかば当然である。よく戦った者が脱落者の卑劣を裁くのは、やむを得ないと思われるからだ。しかし『俘虜記』のはらんでいる辛辣なアイロニーは、この二つのグループの差異をも解消してしまう地点にあらわれる。すなわち、前述したように「川下」を行くことが米軍への近接を意味し、「川上」にいたることが米軍から遠ざかることを意味した以上、尾高という上

等兵の俘虜のつぎの言葉にも半面の真理が含まれていたからである。

「何だと。ただ山ん中逃げ廻ってやがった癖に、大きなことをいうな。憚りながら俺達は最前線に出たばっかりに負傷して、止むを得ず俘虜になったんだ。(後略)」

こうして俘虜と非俘虜の落差さえあいまいになり、忠誠の根拠そのものが崩壊するとき、観念的な意味づけの下から露出してくるのが、人間に固有のエゴイズムにほかならない。戦後の初期に出現した戦争文学の多くが、人間のエゴイズムをいわば〝反戦〟的なものとしてとらえていたのにくらべて、『俘虜記』は明らかに異なる性格をそなえている。収容所でおこなわれる物々交換の浅ましさに悲しみをおぼえる「私」は、人間性のあり方そのものに絶望を感じているのであって、この絶望は作者の〝人間〟にたいする高い夢の、反語的な表現というべきものである。もしそうでなければ、

我々の「実存」は囚人である。新しき俘虜も古き俘虜も、否応なくその一色に塗りつぶされて行く。

という言葉の出てくるはずはなかったのである。ここにおいて収容所は戦後の占領期のアレゴリー

であるとともに、神の囚人としての人間社会のアレゴリーの様相さえ持つにいたる。

やがて俘虜は急速に堕落し始めた。

戦争が終ると共に、レイテ島第一収容所三千の俘虜の心からは、唯一の道徳的な棘は取り除かれた。彼等が敵中に生を貪っている間に、太平洋の各地で続々命を殪しつつある同胞に対するうしろめたさが、突然なくなった。死んだ者は運が悪く、我々は運がよかった、それだけの話だ、ということになった。

こうして俘虜から倫理感覚が消滅し、一種のニヒリズムが支配するとき、人びとは空虚からの脱出を求めるかのように演芸大会に熱中する。この上演作品がリアリズムによらない仮構の悲劇である点は注目されてよい。アリストテレスの定義にあるように、喜劇が劣った人間をえがくとすれば、俘虜の境涯が人間の最低線の一つである以上、悲劇の虚構性を通じて俘虜の現実からのがれる以外に、心の慰めはなくなっているのである。

こうして虚構の世界に逃避しながら現実を忘れようとした試みは、敗戦直後の日本人が「敗戦」を「終戦」と呼び、「占領軍」を「進駐軍」と呼ぶことで危機感をのがれようとしたのと同じ根拠によっている。自己幻視化によって危機を回避するのは、人間の生得の知恵と呼んで呼べないこともない

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co